

二重否定の発想と論理

中 右 實

英語には多重否定構文とも称すべき構文が二種類ある。ひとつは、ただ、否定の意味を強調するためにのみ、否定語を積み重ねるといった俗語用法である。たとえば、(1)の(a)がその文例である。これは単文(単一節)である。にもかかわらず、否定語を三つ含んでいる。しかし、その意味は標準英語の(b)が表わしている意味と同じである。

- (1) a. *No one never said nothing* about it.
b. *No one ever said anything* about it.

それとは別に、いくぶん周延的かもしれないが、標準英語として立派に確立している用法に二重否定構文がある。やはり単文なのに、二つの否定語が含まれている。その典型的な用例を拾い集めてみると、次に示すように、二重否定構文にも多様な型があることに気づかされる。

- (2) a. *I haven't done nothing*.
b. *No one has nothing* to offer to society.
c. *Not many people have nowhere* to live.
d. *Not all imperatives have no* subject.

ここでの関心は、この二重否定構文の基本的な性質の解明とその説明にあるが、わたしの知るかぎり、この構文は従来、正面切って扱われたためしはない。否定の意味論としては最も詳しい Horn (1989) にも、この種の例はみつからない。これまで、いくつかの事実観察と解説はあるにはあったが、それはどれも断片的な記述研究の域にとどまり、説明理論への志向は意識にもものぼらなかったとみられる。これはもちろん、一般意味理論の明示的な定式化を抜きに

しては始まりようがない事柄だからである。その間の事情も、望むらくは、本論の最後には明らかになっているはずである。

1 命題論理と自然論理

1.1 (2) の文例を前にして伝統的な命題論理学 (propositional logic) は、どのようにいうであろうか。(2) の文を説明して、それは順次、(3) の文と同じ意味であるというにちがいない。

- (3) a. I have done *something*.
 b. *Everyone* has *something* to offer to society.
 c. *Most* people have *somewhere* to live.
 d. *Some* imperatives have *a* subject.

個別に比べてみれば明らかなように、ここでは要するに、形式論理的等価性が主張されている。というのも、その根底には、二つの否定が相互に打ち消し合って肯定になる、という発想があるからである。しかも、この帳消し (cancellation) の論理には、ただ二つの否定語だけにとどまらず、それと数量詞との相互作用が密接に関係している。

否定の形式論理の側面を理解するうえで、以上の観察は確かに重要な点を示唆している。しかし一方、自然言語の心理的側面からいえば、これには物足りなさが残る。おのずとひとつの疑問が湧いてくる。これではなぜ、わざわざ、二つの否定語を用いて二重否定構文を作らなければならなかったのか、それに説明がつかない。結局は、肯定命題で終わるというのであれば、なにも遠回しに言わなくても、はじめから肯定文で済ますことができたはずである。そのほうがことばの経済にもかなうというものではないか。この疑問は実際、すこぶる素朴なものだが、しかし同時に、まっとうな感覚に裏打ちされてもいる。ここには形式論理を超えた自然論理への渴望があるといえる。

1.2 改めて心理的側面から見直してみると、形式論理学よりも一段と自然言語寄りのアプローチが思い浮かぶ。(2) の文例はそれぞれ、次のような言い替えに対応していると考えることができる。

- (4) a. It is *not* the case that I have done *nothing*.
 b. There is *no* one who has *nothing* to offer to society.
 c. There are *not many* people who have *nowhere* to live.
 d. It is *not* the case that *all* imperatives have *no* subject.

この言い替え関係は確かに自然論理を直截簡明に反映しているといえそうである。というのも、ここにはもとの否定語がそのまま生かされていて、その作用域の広狭の差が上位節と下位節とに対応づけられているからである。ときに作用域の広いほうの否定語は文否定と呼ばれ、また狭いほうの否定語は動詞句否定と呼ばれることがあるが、これには視点の混在があって、不透明な意味合いが伴うので、ここではただ、意味論的な作用域の側面だけに限定し、前者を外部否定、後者を内部否定と呼ぶことにする。

そしてそのうえで気づかれることだが、言い替え関係に二通りのタイプがある。肝心なところは、上位節の言語形式である。それは次のような一般的スキーマに還元できる。ひとつは *It is not the case that* であり、もうひとつは *There is no (one/thing) that* である。前者を仮に真理構文と呼び、また後者を存在構文と呼ぶ。ここでは (b) と (c) が存在構文の言い替え例であるのに対し、(a) と (d) が真理構文の言い替え例である。

いずれの言い替えが成り立つかは、外部否定の担い手が何であるかによって異なる。それが否定辞 *not* か、それとも *no*-系列の否定語かである。否定辞 *not* が外部否定になっているときには、それは原則的に真理構文と関係づけられるのに対し、*no*-系列語が外部否定になっているときには、それは存在構文と関係づけられる。これは直観的にもうなずけることである。*not* は述語否定辞なのに対し、*no*-系列語は存在限量詞だからである。それゆえ、*It is not the case that* は真理述語 (*be*) *the case* を否定し、否認の意味を表わすのに対し、*There is no (one/thing) that* 構文は存在述語を否定し、非存在の意味を表わしている。ただ例外的に、述語否定辞 *not* の場合でも、その直後に *many* がくれば、(4c) で示したように、存在構文と結びつけることができる。いうまでもなく、原則どおり、*It is not the case that many people have nowhere to live.* の形式で言い替えることには何の支障もない。

二重否定構文のなかには、ほかにも、一見したところ、副詞が介在するなどして、一段と複雑な様相を呈するものがある。しかし、この種のものについても、前述の基本的なスキーマを下敷きとして、その延長線上に自然に位置づけ

る道を探ることができる。たとえば、次のような文例がある。

- (5) a. He *hasn't often not* kept his promise.
 b. He *doesn't often really not* understand.
 c. John *isn't deliberately not* being considered for the job.

このうち、(5 a) を例にとって、それが典型的には it 分裂構文と自然に関係づけられることをみよう。次の (6) で示すパラダイムは、その一連の過程を示している。

- (6) a. He *hasn't often not* kept his promise. (= (5 a))
 b. It *isn't often* that he has *not* kept his promise.
 c. It *isn't* the case that it is *often* that he has *not* kept his promise.
 d. It *isn't often* the case that he has *not* kept his promise.

少なくとも外見上、(a) の二重否定構文が (2) のどの例とも異なるのは、否定語が二つとも否定辞 *not* であること、さらにいわゆる文副詞が介在していることである。端的に言って、ここには焦点化現象が際立っている。直観的に言って、外部否定の *not* は *often* にかかる。その一方、内部否定の *not* は *kept* にかかり、*not kept* = *broken* と解される。いずれの場合も、*not* の右側にくる要素が否定の焦点部位である。日本語で (a) の意味を因数分解して示すと、[[[彼が約束を守らなかった] ことがよくある] というわけではない] という具合である。これは (6 c) の構文に匹敵している。

以上の直観的理解を前提とすれば、(a) の二重否定構文の意味を因数分解して順次、示してゆけば、さきに仮定した基本スキーマに至り着くのである。(a) は直観的にはまず、(b) の it 分裂構文に言い替えることができる。*often* が外部否定の焦点だからである。この (b) で it 節内の否定は外部否定なので、それは真理構文と関係づけることができる。(b) を因数分解した結果が (c) である。その (c) の上位二つの節を、こんどは真理構文を軸にして縮約した結果が (d) である。(d) が基本スキーマの実現形である。まとめていえば、一見入り組んだ (a) のような二重否定構文も、it 分裂構文を媒体として、(d) のような真理構文と関係づけられることがいまや明らかである。くりかえすが、ここで *often* が主節の成分であることに注意すべきである。

2 モダリティ内否定と命題内否定

2.1 形式論理本位の言い替え関係に比べて、存在構文と真理構文による言い替え関係は自然論理的な確な反映であるといつて、いまや、まちがいなさそうである。自然言語的手法はなるほど、このように、命題論理学よりも的確に二重否定の構造を捉えているところがある。とはいえ、それでもなお、二重否定の本質を十全に捉え切っているとはいえない。端的にいつて問題は、二つの否定をとともに命題内容成分として捉えているところにある。さらにいえば、外部否定と内部否定は果して意味機能が同じなのか、それとも違うのか。この設問こそが根本問題なのだが、残念なことに、これがこれまで問題意識にさえのぼっている様子はない。ここに欠落している視点は、言語表現の主観と客観の区別である。自然言語的手法は、文の意味はただ命題内容だけからなるとする立場を暗黙の前提としているからである。この点では命題論理学から一步も先に進んではないといえる。

しかしこれまでに、いろいろなところ（たとえば中右 1984-6, 1992a や Nakau 1992b）で例証したことが、文の定常的意味の骨格は、客観的な命題内容のうえに、主観的なモダリティが加わった二極構造を形づくっていると考える理由がある。そして二重否定の意味論を説明するためには、この二極構造論が決定的な役割を果たすことが、ここでも確認されるのである。その出発点は、二重否定に役割分担があることを認識することである。その原理は次のように一般化できる。

(7) 二重否定の解釈原理

独立節（主節）レベルにおいて、外部否定はモダリティ内否定であるのに対し、内部否定は命題内否定である。

ここで〈モダリティ内否定〉(modal negation) とは、主観的なモダリティ領域内に生ずる否定のことである。それゆえ、その否定はモダリティを否定する成分としてではなく、むしろ、モダリティを構成する不可欠な成分として機能するものである。たとえば、英語では I don't know, I'm not at all sure, undoubtedly, unbelievably, no doubt, not surprisingly など、日本語でも「(まったく) わからない」「(全然) 知らない」「思いも寄らない」「疑いもなく」「信じられないことに」など、否定要素を含んだモダリティ表現がある。この否定

は定義上、モダリティ内否定である。そして一方、〈命題内否定〉(propositional negation)とは客観的な命題内容領域内の否定のことである。それゆえ、その否定は否定命題を作る構成成分(つまり否定演算子)として機能するものである。

すでに明らかなように、この原理の前提になっているのは、文の意味の二極構造論と主観的モダリティ論である。とりわけモダリティ論が決定的な意味をもつ。ここでモダリティとは〈話し手の発話時点における心的態度〉のことであり、しかも発話時点とは〈瞬間的現在時点〉を指すものとする。以上二つの理論の相互作用のもとでのみ、モダリティ内否定と命題内否定とが言語的に有意義な体系的意味づけを与えられることに注意すべきである。

念を押すまでもなく、これらの用語は直観的な記述用語とは区別しなければならない。通例、モダリティ否定といえ、否定辞 not が法助動詞を否定する場合を指している。これによれば、He cannot swim. で not は swim ではなく can を否定しているので、モダリティ否定といわれる。しかし、わたしの枠組みでは、この cannot は命題内否定である。能力の can は命題内容成分にほかならないからである。

(7) で注目されるのは、二つの否定語の役割分担である。作用域の広いほうの否定語つまり外部否定はモダリティ成分であるのに対し、作用域の狭いほうの否定語つまり内部否定は命題内容成分である。在来の分析と決定的に違うのは、外部否定が主観的なモダリティ成分であるという点である。主節内に生ずる二つの否定語がともに命題内容成分であるということはない。こういう予測がたつのである。そしてこの予測はまちがいなく確証される。以下、この線に沿って若干の論拠をみてゆくことにする。

2.2 さて、本筋にもどって、(7) の一般原理がどのようにあてはまるかを考えてみなければならない。これまでに掲げた二重否定構文(つまり(2)と(5))はすべて、モダリティに関しては無標の平叙文である。ここで無標の平叙文とは、モダリティが明示的な表現形式においては実現していない平叙文のことをいう。このモダリティは典型的に断定の陳述態度を表明するのだが、これがここでは二重否定構文のモダリティの一構成成分となっている。しかしそれだけではない。すでに明らかなように、外部否定が同じモダリティのもうひとつの構成成分である。これら二つの成分が合体してひとつのモダリティが形成されている。すなわち、断定成分と外部否定成分とが組合わさって〈否認〉

(denial) という、一段と特定化されたモダリティができあがっている。

十分に納得するためには、実例を個別に吟味してみななければならない。厄介な手続きというほかないが、できるだけ英語の真意に近い日本語を見つけだし、いったんそれが見つかれば、こんどはそれを頼みとして、もう一度、英語にもどり、その真意を確かめてみるくらいのことはしたい。論点を際立たせるために、形式論理本位のパラフレーズに比べ、自然言語寄りのパラフレーズのほうが、よりの確な意味構造を反映していることを確かめておきたい。

代表的な一例として、まず(2b)をみよう。(3b)によれば「社会のためになる素質がだれにもある」といつていることになるが、(4b)によれば「社会のためになる素質が備わっていないような人はいない」といつていることになる。なるほど、突き詰めると、(4b)は(3b)にまで還元される。これは功罪相半ばする。論理的等価性は保持されとしても、心理的等価性は捨象しなければならない。次に(2c)について。これは(3c)によれば「たいいていの人には住むところがある」ということになるが、(4c)によれば「多くの人に住むところがないというわけではない(というのではない)」ということになる。

以上二例においてその差は歴然としている。後者の自然言語的手法のほうが二重否定の心理的側面をよりの確に捉えていると感じられる。二つの否定の働きに違いがあることは、日本語からでも十分に類推がきく。まとめていえば、日本語で外部否定は、典型的には「(という)のではない」「(という)わけではない」という表現形式で言い表わされる。これが否認の態度表明であるというのも、少なくとも直観的にはうなずける。以下、さらに議論を深めたい。

まず第一に、否認行為は否認内容と否認態度の二つの側面からなると考えると、二重否定構文の否認内容のほうは、話し手の意識のなかに発話時点に先だって存在している命題的知識である。これを既定的前提のある知識、あるいはもっと詰めて、既定的知識と呼ぶことができる。否認態度は情報として確定済みの命題内容(ただし、事実として確定済みの命題内容ということではない)についてそれを非として退ける態度のことなので、否認内容には常に何らかの前提があり、それを既定的前提(ただし叙実的前提ではない)と呼ぶのである。詳論については中右(1983)を参照。

第二に、二重否定構文の否認態度のほうは、話し手の発話時点にのみ帰属するものなので、これは定義上、主観的なSモダリティの範疇に属する。ついでにいえば、その構文のテンスが現在・過去時制のいずれであっても、それから

独立して外部否定は常に発話時点に帰属するものとして理解されるからである。以上の観察は母語話者の直観の本質を捉えていると思う。少なくとも精神において同じ路線にあると読める論及が Lyons (1977) と Huddleston (1984) にみえる。傍証としての意味はあろう。

3 二重否定の自然論理

以上の論点をすべて併せて確認する意味で、次の談話を考えてみることができる。Hurford and Heasley (1983: 284) で見つけたが、これは貴重な例である。

(8) A: You and Jim really must come round to my place some evening.

B: Yes, we'd like to.

A: Of course, you two *don't* drink, do you?

B: Well, we *don't not* drink.

ここで肝心な部分は、話し手Bの最後の発話である。ここでBはわざわざ二重否定構文を用いている。Bは直前のAの発話に対し、なぜ、Well, we don't not drink. と応じたのか。さらにいえば、なぜ、Yes, we do drink. とは言わなかったのか。この問いに答えなければならない。

粗筋を追ってみると、話し手Aに「ぜひともうちに来てください」と誘われ、話し手Bは「ええ、ぜひとも」といって応じている。それに続いてAは「もちろん、お二人とも酒は飲まないですよ」と発話している。着目すべきは、この発話に対するBの応答である。気持ちとしては、どうやら、「うーん、飲まないわけではないんですけど」といった趣旨である。「全然飲まない、あるいは飲む意欲がない、と言ってしまえばうそになる。ほどほどにはいただきますよ」と言いたい気持ちなのである。

話し手Bの最後の発話 Well, we don't not drink. という応答の成り立ちをみると、そこにこの解釈の手がかりがある。注目すべきは、この発話が直前のAの発話 you two don't drink を下敷きとしていることである。この否定命題にもうひとつ否定辞 not を上乗せした結果として二重否定構文ができ上がっている。思い切って、We don't "not drink". のように引用符を付けてみるとわ

かりやすい。

急いで言い添えるが、相手の言い分を引用符でくくって提示するというのは単なる説明の便法ではない。この用法は実際にもあるのである。わたしが遭遇した実例を次に掲げる。

- (9) It is odd that *coffee-grounds* is plural. They may be 'composed of particles', but they are obviously *not* 'not too many for anyone to be able to count'. The point is even more striking with *dregs* and *lees*, which are largely liquid. (Palmer 1990)

(coffee-grounds が複数だというのはおかしい。確かにコーヒーの出し殻が「粒でできている」としても、明らかに「数えられないほど多すぎることはない (= 数えようと思えば数えられる)」というわけではない (= というのはあたらない))

- (10) For example, nouns such as *heap* or *committee* are *not* "semantically plural but syntactically *not* plural". (Wierzbicka 1991)

(たとえば, *heap* や *committee* のような名詞は「意味上は複数だが, 統語上は複数ではない」というのはあたらない (= というわけではない))

(9) はパーマーが Wierzbicka (1988) を書評したなかの一節である。注目はもちろん、第二文の二重否定構文である。ここはパーマーがウィアズピッカのことはをじかに引用して、それを否認しているところである。二つの否定辞の責任の所在が明確である。外部否定はパーマーに、また内部否定はウィアズピッカに帰属すべきものである。ここには二重否定の論理が文字どおり透けて見えている。

(10) も同様である。こんどはウィアズピッカが論文中で Hudson (1976) の一節を取り上げて批判しているところに出てくるものだが、引用符内の表現がハドソンのことばで、それをウィアズピッカは自分のことばのなかに組み込んで否認している。

このように、二重否定構文の成立事情をたどってみると、内部否定が他人の陳述内容の一部であればこそ、外部否定がそれを否認するという働きをしていることが一段と鮮明である。否認行為とは、事前にだれかによってはっきりと陳述されたり、そうでなければ場面によって暗に含意されたりしている事柄を

偽 (false) ないしは不適切 (inappropriate) として却下する行為のことだからである。

ふたたび最初の例 (8) にもどるが、仮にも話し手Bが最後の陳述で Yes, we do drink. といったとしたら、どうなるであろうか。これでは真っ正面から話し手Aの陳述に異議申し立てをしていることになる。「飲まないなどというのは大間違い、大いに頂きますよ」というメッセージがまっすぐに伝わってくる。かくして We don't not drink. と We do drink. との間には天地の差があることがはっきりする。伝統的形式論理学は否定+否定=肯定という公式を金科玉条とするが、これでは自然言語のデリカシーに遠く及ばないこともまた、すでに明らかなはずである。

4 否認態度の概念構造

いまや否認態度 (否認判断) の意味概念構造をはっきりと定式化することができる。われわれの枠組みによれば、二重否定構文の意味構造は、次の (11) で示すような表示スキーマとして定式化される。(ただし $_{SM}$ はSモダリティを表わし、また $_{P_4}$ は命題内容を表わすとする。)

(11) [$_{SM}$ I REJECT IT AS NOT TRUE] [$_{P_4}$ NOT PROP³]

あらかじめ加えるべき若干の注釈がある。全体としてみると、(7)の見立てどおり、二重否定がモダリティ内否定と命題内否定とに振り分けられていることが確かめられる。まずSモダリティの磁場に着目すると、ここでモダリティは否認態度を表わすことが確認済みである。否認のモダリティは単刀直入に I DENY という内部構造を与えることもできないわけではない。しかしここでは I DENY を因数分解して、I REJECT IT AS NOT TRUE という内部構造をもつものとして定式化している。

この概念構造は大きく二つの部分からなる。ひとつは I REJECT IT という上部構造であり、もうひとつは AS NOT TRUE という下部構造である。この下部構造こそが外部否定の直接的反映である。これは命題内容を偽ないしは不適切と査定する役割を分担している。ここで TRUE は偽ないしは不適切の意味を表示するものとする。そして一方、上部構造は、そのように査定された命題内容を却下する役割を分担している。これは実際、否認の直観的概念を的

確に捉えていると思われる。くりかえすが、否認態度とは、あらかじめ与えられた命題内容について、それを偽ないしは不適切と査定したうえで退ける立場表明であると解されるからである。

いろいろな二重否定構文に (11) の表示スキーマをあてはめてみると、実際のところ、否認のモダリティに (11) で示した程度に細密な内部構造を付与しなければならない証拠が出てくる。たいていは、I REJECT IT AS NOT TRUE は I DENY で代用することができるけれども、決してこの代用がきかない実例もある。その代表例として、(2a) と (5a) を取りあげ、その意味表示を比べてみることにしよう。それぞれ (12b) と (13b) のようになる。

- (12) a. *I haven't done nothing.* (= 2a)
 b. [_{SM} I DENY] [_{P4} NOT [_{P3} I HAVE DONE ANYTHING]]
- (13) a. *He hasn't often not kept his promise.* (= 5a)
 b. [_{SM} I REJECT IT AS NOT OFTEN TRUE]
 [_{P4} NOT [_{P3} I HAVE KEPT HIS PROMISE]]

(12) の例はモダリティが純粋な否認態度を示しているので、I DENY で代用がきく。それゆえ、簡略表記の I DENY が用いてある。外部否定はこのモダリティのなかに組み込まれている。その一方、全体命題 PROP⁴ は否定値 NOT と中立命題 PROP³ からなる。内部否定はこの否定値として機能している。これがいちばん典型的な場合である。

しかし一方、(13) の例では実際、否認のモダリティを I DENY として簡略表記することはできない。その理由は、(a) の *often* が否認のモダリティの一構成成分を形づくっているからである。(b) をみれば *often* は、モダリティの一構成成分として、下部構造のなかに位置づけられている。しかもそれは、注意すべきことに、NOT OFTEN TRUE であって、OFTEN NOT TRUE (=OFTEN FALSE) ではない。これは実際、意味直観とも符合している。さきにみた自然言語寄りの言い替え関係を想起してみれば、*It is not often the case that* における語順との平行性がその意味表示を裏づけている。

5 様相論理と自然論理

5.1 (7)の原理の骨子は、二重否定構文の外部否定がモダリティ内否定であるという点にこそあるが、これを端的に示す証拠は、モダリティが有標の場合、わけても法助動詞がモダリティ表現として生じている場合から出てくる。次にその種の代表例がある。

- (14) a. If a tree is a beech, it *cannot* at the same time be *not* a beech.
 b. John *couldn't* have *not* finished his work by now, could he?
- (15) a. Well, I just *would not not* sunbathe on such a beautiful day.
 b. Charley *wouldn't* have *not* seen the money if he had been looking for it.

あらかじめ(14)から意味をとっておくと、(a)は「ある木がブナであるならば、それが同時にブナでないわけがない」という趣旨だし、また(b)は「ジョンがいまだに仕事を仕上げていないなんて、おそくないでしょうね」といった具合である。(15)のほうに移ると、(a)は「こんなに天気すばらしい日なのに日光浴をしないなんて法はないでしょう」といったあたりになるし、また(b)は「チャーリーがそのお金を捜していたんだったら、目に止まらなかったわけがないだろう」といった趣きである。こういった日本語からも察せられるように、二重否定の役割分担は直截簡明である。なかでも外部否定が認識用法の法助動詞 *can*, *could*, *would* を限定していることから、それがモダリティ内否定として働いていることは疑いようがない。

様相論理学(modal logic)の流儀でいえば、(14a)の場合の論理構造は *not* (*can* (*not* (*P*))) なのに対し、(15)の場合の論理構造は *would* (*not* (*not* (*P*))) である。(14b)についてはすぐあとでたちもどる。ここで共通項の *not* (*P*) は否定命題を表わし、それには問題はない。問題なのは、その前にくる部分である。*not* (*can* ...) の *not* は *can* を否定しているけれども、*would* (*not* ...) の *not* は *would* を否定しているのではない。むしろ、この *not* はその直後の否定命題 *not* (*P*) を否定しているので、*would* (*not* (*not* (*P*))) は結局、*would* (*P*) にまで還元されてしまう。これはもう明らかなように、冒頭で指摘した命題論理学と共通した問題点である。

5.2 ところが一方、自然論理のほうはむしろ、比較のために敢えて同じ方式で示せば、can't (not (P)) であり、また wouldn't (not (P)) であることを主張していると思う。これは意味解釈からも明らかである。つまり骨子は、形式論理とは食い違って、can't はもとより、wouldn't もまた、主観領域内において融合一体化した複合モダリティ表現を形づくっているという点にある。

以上のことを踏まえ、(14b) の couldn't の場合を考えてみよう。could はときに因数分解され、it would be possible to の形式に言い替えられることがある (cf. Leech 1971)。このことから推して、(14b) は not (could (not (P))) よりむしろ、would (not (can (not (P)))) とでも示すべき論理構造をもつとするほうが適切かもしれない。しかし、いずれにせよ、自然論理に従えば、これも最初の三つの要素が主観領域に帰属すればこそ融合一体化し、直観的には It-would-not-be-possible-to として言い表わせるような複合モダリティの意味単位を形成しているものと解される。

以上の観察からわかるように、自然論理において決定的に重要な視点は、主観的記述と客観的記述の区別である。主観領域に帰属する要素は、その領域内にあればこそ、その共通性のゆえに融合一体化する一方、客観領域の要素とは対極にあるものとして一線を画するのである。ところが、形式論理学は、命題論理学と様相論理学を問わず、すべての言語表現を命題内容成分として扱うので、われわれのいう主観的モダリティ表現も、例外なく客体化され命題内容成分として扱われてしまう。言語記述の主観と客観の対立的視点は、それがどのように理論化されようと、自然言語の無視しえない意味側面である。

さて議論を本筋にもどして、法助動詞をモダリティ成分として含むような二重否定構文においても、モダリティ内否定の中身はやはり否認であるという点は揺るがないことが、いまや確認される。無標の場合には単刀直入な否認態度が含意されるのに対し、これら有標の場合には、法助動詞の個別性が加味されて、その分、微妙に複雑な否認態度が含意される。すでに指定した否認の基本スキーマに基づけば、法助動詞を組み込んだ否認のモダリティは、次のような概念構造もつものとして規定することができる。それぞれの固有性を際立たせるために、対立部分をイタリック体で示してある。

- (16) a. can't = I REJECT IT AS *NOT POSSIBLY* TRUE
 b. wouldn't = I *WOULD* REJECT IT AS *NOT* TRUE
 c. couldn't = I *WOULD* REJECT IT AS *NOT POSSIBLY* TRUE

注釈すべき点が二つある。第一に、(16)の定式化には新たなパラメータとして POSSIBLY と WOULD が加わり、それが三者の否認態度の差を特徴づけている。couldn't の場合は結局、can't と wouldn't の二つの場合の組み合わせである。これがさきの事実観察の的確な反映であることはいうまでもない。第二に、(16)の定式化は否認の基本スキーマがまちがいでないことを示す新たな証拠である。すでに述べたように、基本スキーマは大きく二つの部分からなっているが、その二つの部分は新たに導入された二つのパラメータを適切に位置づける準拠棒としての決定的な役割を果たしている。下部構造には POSSIBLY が組み込まれているが、その一方、上部構造には WOULD が組み込まれている。かくしてこれは、否認の概念構造が基本スキーマで指定されている程度に精妙なものでなければならないことを端的に示している。ひるがえっていえば、基本スキーマの I REJECT IT AS NOT TRUE が I DENY にまで還元できるのは、無標の場合だけであるということもまた、いまや明らかである。

6 慣用表現のなかの否定

二重否定の役割分担にかかわる(7)の一般原理を例証する別種の二重否定構文に、否定辞 not を含んだイディオムが関与している場合がある。たとえば、次の(17a)がその例だが、その意味構造をも併せて示せば、概略、(17b)である。

- (17) a. Why *not not* clean the kitchen tonight?
 b. [_{SM} WHY NOT] [_{P1} NOT [_{P3} YOU WILL CLEAN THE KITCHEN TONIGHT]]

話し手の心持ちとしては「今夜は台所を片付けないままにしておいてね」といったところになるかと思われる。そしてその意味構造は概略(b)で示すと

おり、二つの not には役割分担がある。外部否定はモダリティ内否定として、また内部否定は命題内否定として位置づけられている。まず、ここで Why not? は、いうまでもなく、Why don't you? の省略形で、究極的には推奨や依頼といった意味を表わすイディオムである。これは定義上、正真正銘のモダリティ表現である。とはいえ、Why not? の not は、もうひとつの not と比べても、統語論的な資格は少しも違わないわけだから、この文が申し分なく立派な二重否定構文であることには相違ない。

次の組もまた、慣用的なモダリティ表現がかかわり合う二重否定構文である。同じ論点を例証している。

- (18) a. *Won't* you please get into the swimming pool.
 b. Will you please *not* get into the swimming pool.
- (19) a. *Won't* you please *not* come here any more.
 b. [_{SM} WON'T YOU PLEASE] [_{P4} NOT [_{P3} YOU WILL COME
 HERE ANY MORE]]

まず (18) の二文を比べてみると、(a) の話し手は相手に「プールにはいる」ことを依頼しているのに対し、(b) の話し手は相手に「プールにはいらぬ」ことを依頼している。この違いからわかるとおり、(b) の not が命題内否定であるのとは対照的に、(a) の not はモダリティ内否定である。というのも、*Won't* you please? は、*Will* you please? とともに、not のありなしにかかわらず、依頼のモダリティ表現として働いているからである。

そうすると当然、これら二つの否定辞がともに生じている文が現に存在したとしてもおかしくはない。そして実際、その例として (19a) がある。「どうか、もうこれ以上、来ないでくれませんか」という解釈にも無理はない。二つの否定辞には必要とされる役割分担がある。(19b) の意味表示が示すとおりである。

7 二重否定の統語論

7.1 さて、以上みてきたように、二重否定構文は、根底的には、(7) でまとめたような役割分担の一般原理によって統率されているといつてまちがいな

いと思われる。考えるべき問題はなお残っているが、それもこの延長線上で自然に処理できる見通しがある。そのひとつは二重否定の統語論である。要点だけをかいつまんでいえば、どの立場にたっても、単文内に二つの否定辞 *not* を生成する仕組みが少なくとも必要である。詳論は別稿に譲らなければならないけれども、助動詞の本動詞説にたてば、助動詞は補文をとる上位動詞として分析されるので、助動詞と一般動詞の区別なく、動詞（ひいては動詞句そして節）がひとつあれば、それに対応して、否定辞 *not* もまたひとつ生ずることが予測される。

これによれば、単文内でも否定辞は動詞の数だけ生じうる勘定になる。そして厄介なことに、明らかに過剰生成の問題が起こる。一例を挙げよう。John must have been being considered for the job. というのは、まぎれもなく単文である。ここには動詞が五つ含まれているので、否定辞も最大限五つ生ずる計算になる。その結果は、*John must *not not* have *not been not being not* considered for the job. という意味不明な非文になる。あれこれ資料をあさってみると、二重否定構文は存在しても、三つ以上の否定辞を含む多重否定構文は見あたらない。実際のところ、英語を母語とする言語学者も、次のような多重否定構文を許容していないのである。

- (20) a. *John *mustn't* have *not been not* listening at that time.
 b. **Not* many of the boys *didn't* kiss *not* many of the girls.

(a) の例は Akmajian, Steele and Wasow (1979) から、また (b) の例は McCawley (1973) からのものである。とくに (a) の例についてアクメジアン他は「事実上解釈不可能」(virtually uninterpretable) といっている。彼らもまた、ひとつの動詞に対しひとつの否定辞が生じうるような枠組みを採用しているので、この種の非文を過剰生成する弊害を免れていない。問題は、二重否定構文を、三つ以上の否定辞を含む多重否定構文から区別する統語論的説明はないということにある。いったん二重否定構文を許す仕組みを整えてしまえば、それ以上の多重否定構文も自動的に生成してしまうからである。

しかし幸いなことに、この統語論的過剰生成も、すでにみた (7) の解釈原理によって阻止されることに着目しなければならない。この原理が一種のフィルターとして働き、その条項を充足する文だけが、最終的に文法的な文として生成されるという段取りである。(20) のような多重否定構文は、現に三つの

否定辞を含んでいるので、(7)が指定する二つの解釈枠に過不足なくおさまり切れないからであると説明される。

7.2 ところが、単文中に三つの否定語を含んでいるために二重否定の原理(7)に対する反例のようにみえる事例がある。ここには、もうひとつの否定、すなわち、構成素否定 (constituent negation) あるいは局所否定 (local negation) と呼ばれる否定が関与している。次の (21a) がその例である。

- (21) a. Chomsky *doesn't not* pay taxes for *nothing*.
 b. [_{SM} I DENY] [_{P1} NOT [_{P3} CHOMSKY PAYS TAXES FOR NOTHING]]
 c. It *isn't* the case that Chomsky *doesn't* pay taxes for *nothing*.
 d. It *isn't* the case that it is for *nothing* that Chomsky *doesn't* pay taxes.
 e. It *isn't* for *nothing* that Chomsky *doesn't* pay taxes.

余談だが、(21a)は歴史的事実を忠実に映した文である。1960年代半ば、チョムスキーは実際に北ベトナム反戦活動の一環として税金不払い運動を展開し入獄されたいきさつがある。チョムスキーは当時、確かに、理由もなく税金を払っていなかったわけではないのである。

ここで三つの否定語は役割分担している。その意味構造は(21b)で示すとおりである。最初の not は否認のモダリティ、次の not は否定命題を作る命題内否定、そして最後の nothing は、for nothing という前置詞句を作用域とする構成素否定である。このことから、構成素否定は確かに命題内容の一部ではあるが、否定命題を作る否定とは別種のものである。かくして構成素否定は二重否定の原理とは抵触しないことが明らかである。

(21b)の意味構造をそのまま反映したパラフレーズとして(21c)がある。しかしこれでは、否定と焦点との関係が不透明である。文意は「チョムスキーが税金を払っていないのは、理由のないことではない」という趣旨だから、さらに(21d)で示すようなit分裂構文に言い替えられる。ここで内部否定の焦点は動詞句 pay taxes であり、for nothing ではないことがわかる。これは事実に見合っている。それに(21d)は、上位二節を畳み込んで(21e)にまで言い替えられる。これで for nothing が外部否定つまり否認の焦点であること

がはっきりする。これは全体としても直観的解釈に符合した理論化である。ここに含まれる焦点化の過程はどのように明示的に定式化できるか、その具体的方策については中右 (1992a) を参照されたい。

参考文献

- Akmajian, Adrian, Susan Steele, and Tom Wasow. 1979. "The Category of AUX in Universal Grammar." *Linguistic Inquiry* 10: 1, pp. 1-64
- Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Huddleston, Rodney. 1984. *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press
- Hudson, Richard A. 1976. *Arguments for a Non-Transformational Grammar*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hurford, J. R. and B. Heasley. 1983. *Semantics: A Course Book*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Lyons, John. 1977. *Semantics*, Volume 2. Cambridge: Cambridge University Press
- McCawley, James. 1973. "A Note on Multiple Negations, or, Why You Don't Not Say No Sentences Like This One." *Grammar and Meaning*, pp. 206-210. Tokyo: Taishukan Publishing Company.
- 中右 実 1983. 「文の構造と機能」安井稔他著『意味論』, pp. 548-626. 大修館書店.
- 1984-1986. 「意味論の原理(1) - (24)」『英語青年』 130-131巻. 研究社出版.
- 1992a. 「普遍意味論の方法」波多野他編『認知科学ハンドブック』 pp. 334-346. 共立出版.
- Nakau, Minoru. 1992b. "Modality and Subjective Semantics." *Tsukuba English Studies*, Volume 11, pp. 1-40. Tsukuba English Linguistic Society.
- Palmer, Harold. 1990. "Review Article: *The Semantics of Grammar*." *Journal of Linguistics* 26, pp. 223-233.
- Wierzbicka, Anna. 1988. *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 1991. "Semantic Rules Know No Exceptions." *Studies in Language* 15: 2, pp. 371-398.